

台湾と日本の女子大生同士における初対面会話の対照研究 — 話題選択について —

張 瑜珊

1. 研究動機

アルク社が出版している無料『多文化共生マガジン J-Life』(2005)の中には「ニッポンの問題」というコラムで、「日本人とのコミュニケーションは難しい」というテーマについて、ある台湾人留学生が日本語学校の先生にこのような疑問を投げかけた。「先生、日本人たちは、どうして初対面のとき、あまり自分のことを話さないんですか？台湾だったら、お互いの仕事のことなどを聞きあつたりするのですが、日本ではあまりしませんね (p22)」。筆者も日本人との初対面会話の中で、会話の相手から自分に興味を示さず、親近感を感じなかった思いがあった。しかし、親密な対人関係の形成はごく初期に形成されていると心理学者が述べているのに加え (Berg & Clark 1986)、初対面会話そのものが印象形成に繋がると小川 (2000) も指摘している。筆者自身と他の留学生の経験から、会話する両者が所属している文化グループが違うため、それぞれは異なる話題の開示を通して人間関係を構築していくのではないかと考え始めた。そこで、台湾人学生と日本人学生それぞれにおける母語場面での初対面会話の中にどのような話題が話されるかに着目した。

2. 先行研究

初対面会話の話題内容に注目した研究は調査方法という視点から以下アンケート調査によるものと会話実験によるものに分類される。

1) アンケート調査によるもの：

日中対照：曹 (1992) の調査結果から日本人の話題の方が中国人より私的な自分を占める部分が多いということが明らかにされた。三矢 (1995) は中国人と日本人の話題選択の好みが似通っていると述べている。

日米対照：日本人・アメリカ人が好む話題順位

はほぼ一致しているとバーランド (1979) が述べている。西田 (1996) では、日本人は相手の背景に関する話題を必要とすると指摘している。

2) 会話実験によるもの：

日韓対照：女子大学生間のものを取り上げている研究に奥山 (2000) があり、男子大学生間のものを取り上げている研究に奥山、泉 (2001) がある。日韓女子大学生では、日本人は自己開示の話題数が多く、韓国人は特に最初の 0.5 分の時間帯に質問の話題が自己開示の話題の 3 倍に近かった。日韓男子大学生については、日本人は具体的で小さい話題を小刻みに多用するのに対して、韓国人は身上調査的な話題が一段落した後で、抽象的で大きな話題をとりあげる傾向が見られた。

以上の対照研究から、中国人、韓国人、アメリカ人の初対面会話の話題には、日本人との共通点と相違点が観察された。しかし、同じ中国語話者とも言える台湾人中国語話者を対象にして、初対面会話の話題に絞り日本と対照した研究は、管見の限りまだ見当たらない。

さらに、談話分析の分野で初対面会話と対人関係の関連について中心に扱うものはまだ僅かである (Svnenig, 1999) ため、今後は実際の会話データから検証する必要があると考えられる。

3. 研究目的と課題

台湾・日本の接触場面の基礎研究として、本研究は、両グループの女子大生同士による母語での初対面会話を話題選択の観点で分析し、両者の差異を明らかにすることを目的とする。両者の初対面会話の特徴や差異が明らかになれば、互いの接触場面における人間関係形成の事前知識や心構えとして教育的示唆を与えることができると考えられる。

具体的な研究課題としては、台湾と日本の女子大

生同士の初対面会話では、(1)どんな話題を選択するか。さらに、(2)時間の経過に連れ、両グループの話題選択に変化が見られるか、とした。

4. 調査方法

台湾の T 大学と日本の O 大学で、複数の方法を用いて協力者を募集し、最終的に台日 20 名ずつ（各 10 ペア）の協力者を得た。募集ルート、専攻、学年などを考慮し、各ペアの上下関係が一致するような初対面状況をセッティングした。また、全ての実験では、始めに「自由に話してください」と指示を与えた後、20 分前後の会話を行ってもらい、それを録音したものを本研究の分析対象とした。

5. 分析方法

分析対象にした会話データをすべて「話題」別に区切る。本研究における「話題」の定義は、三牧(1999)の「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念を話題とする」に従うこととする。

さらに、区切られた話題からお互いの親近感を測るために、Svenneving(1999)と Tryggvason(2004)による「話題タイプ」を用いた。話題タイプの下位カテゴリーは以下の通りである¹（カテゴリー1～4）は Svenneving,1999 からよるもので、カテゴリー5）は Tryggvason,2004 によるものである。

- 1) セッティングトピック (Setting Topics) : その「場」で誘発される話題 ex : 録音設備、名前の交換など。
 - 2) 百科事典的トピック (Encyclopedic Topics) : 参加者の日常生活に直接に関連しない話題。ex : 教育問題、学科全般、ニュース、一般の人（学校の先生）。
 - 3) 自己に関するトピック (Self-oriented Topics) : 話者が自分に関する話題を自ら言い出すもの。
 - 4) 相手に関するトピック (Other-oriented Topics) : 会話の相手に関する話題。殆どが質問形式で引き出される。
 - 5) 第三者に関するトピック (They-oriented Topics) : 現場にいない友達や、クラスメート、家族成員などに関する話題。
- コーディングは各話題の先行発話を基準として各カテゴリーの定義に沿って分類し、話題タイプの割合

を算出する。

そして、20 分のデータを 5 分ごとに区切る。再び、各時間帯の話題タイプの割合を算出する。5 分という区切り目は必ずしも話題の境界線と重なっているとは言えない。そのため、たとえば話題 A は途中で時間の区切り目が入る場合、話題 A の話題タイプを区切り目の前の時間帯に加算される。

6. 分析結果

台湾・日本の女子大生同士における 20 分の会話データでは、どんな話題を選択するかという課題(1)に関して、図 1 のような結果が出た。

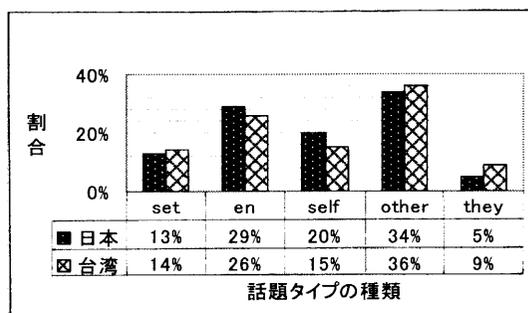


図 1 20 分会話データにおける話題タイプの割合

図 1 から分かるように、台湾グループと日本グループは話題タイプの順位が同じになっている。言い換えれば、両グループは相手に関するトピックが一番多く、次に百科事典的トピック、自己に関するトピックとセッティングトピックである。一番少ないのは第三者に関するトピックである。

次に、時間の推移における話題タイプの割合の変化は、次頁の図 2 から図 5 のようになった。

図 2 から図 4 における台湾グループと日本グループが選択される話題タイプの折れ線は大きな相違が見られなかった。図 2 を除いて、図 3 と図 4 は M 字型になっている。つまり、百科事典的トピックと相手に関するトピックという話の流れに、自分に関する話題が挟み込まれ、周りの環境から誘発される発話と友達探しや家族に関する話題が点在している。

図 2 は初対面会話同士の最初の 5 分間の会話であるため、相互に出会った瞬間は互いに関する情報が欠如している様子が一目瞭然である。互いに共有している状況から話題を取り上げ、会話を開始したり、名前、所属を交換したりするため、セッティン

グトピックの割合が、顕在的に多くなっている。さらに、互いを知り合うため、百科事典的な話題をす

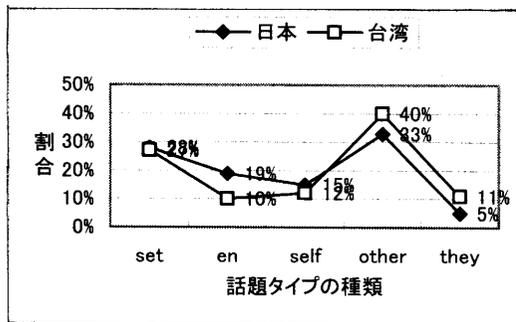


図2 0-5分における話題タイプの割合

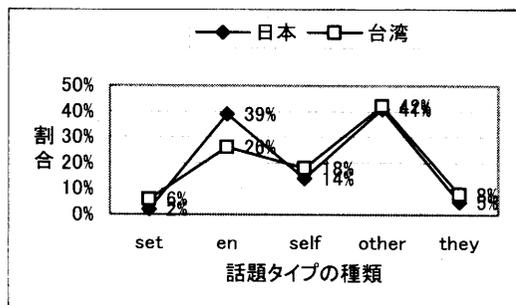


図3 5-10分における話題タイプの割合

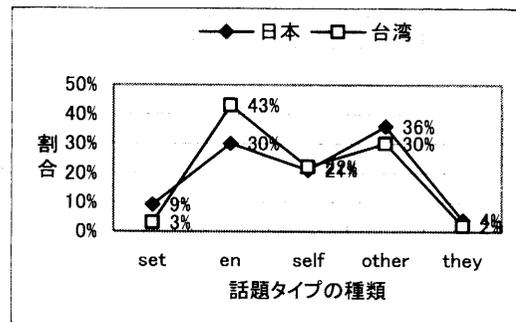


図4 10-15分における話題タイプの割合

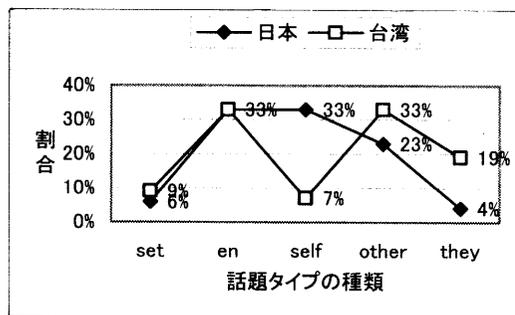


図5 15-20分における話題タイプの割合

るより、相手に関する情報を聞きあつたりした。しかし、図2のような現象は時間の経過とともに、変化していく。それは台湾、日本両グループの共通した傾向だといえよう。

しかし、会話開始から15分を経過してから、台湾グループと日本グループは1%水準での有意の差が現れた ($\chi^2(4)=12.90, p<0.01$)。図5の曲線を観察してみると、日本グループはM字型分布になっている話題タイプがへの字分布に変化していくことが分かった。一方、台湾グループは自分に関する話題の割合が下がるにつれ、第三者に関する話題が増えていく。しかし、M字型の傾向はそのまま維持されている。台湾グループの女子大学生はこの時間帯において、自分を語るより、共通の友人に関する話、あるいは、自分か相手かの家族に関する話題をする傾向がある。

以上の結果を整理した上で、以下のまとめができる。

- (1) 20分の初対面会話に関しては、台湾と日本の女子大学生間の差異があまりなかった。
- (2) しかし、時間の推移とともに、日本グループは話題タイプの割合が変わっていたが、台湾グループは変わっていなかった。
- (3) 会話開始から15分経過した後、日本グループは自分のことを語る傾向がある。台湾は第三者に関する話題を取り上げることと相手に関するトピックの割合に変化がなかった。

7. 考察

以上の分析から、台湾グループと日本グループは違うプロセスを通して、互いの関係を構築していくと考えられる。

まず、20分全体の会話は台湾グループで話されている話題タイプと日本グループのものとは大きな異同がなかった。これは、先行研究で述べた三矢(1995)の日中が好む話題が似ているという結果と類似している。

しかし、両グループの話題選択が同じように見えても、実は時間の推移とともに会話開始15分以後に両グループには大きな相違があるという分析結果が明確になった。その結果について考察してみると、日本グループで自己に関するトピックが多くなるということは、そのカテゴリーの定義と照らし合わせてみれば、「自分に関する話題は話者が自ら言い出

すもの」と捉えられる。つまり、自己開示と同一視できると思われる。反対に台湾グループでは、この時間帯で相手に関するトピックは、時間の通過にも関わらず、ほぼ同じ割合で表出されている。相手に関するトピックはその定義に見られるように、「殆どが質問形式で引き出される」という特徴がある。言い換えれば、台湾グループは会話の相手と関係作りの時、会話の相手に質問をし続けることが一般的である。むしろ、接触場面では台湾人は日本人が相手の自己開示をしてくるのを待つことに対して、それを親近感として捉えなくなると推測できる。

以上、先述した無料マガジン J-Life から引用した台湾留学生の質問に振り返ってみよう。彼女は台湾人はお互いに仕事のことなどを聞きあったりするが、日本人はそうでないと述べていた。その「聞きあう」ことはまさに台湾人が持っている関係作りのポイントになろう。本対照研究によって、台湾人と日本人の接触場面に起きたすれ違いに関して、ある程度その要因の推測ができたと言えよう。

8. 今後の課題

本研究で導いた結論は同質性が高い女子大生間の特有の現象かどうか、さらに検証する必要がある。つまり、上下関係、性別、職業などの要因からさらに深めなければならない。そして、同じ状況での初対面でない女子大学生の会話、いわば、親友関係を持つ二人の会話は、その流れの変化が今回結論と違ってくるかを対照的に比較することも考えられる。

注

1. 各カテゴリーに関する会話例は紙面の関係で割愛した。

参考文献

- 小川一美 (2000) 「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)』 47 巻 173-183
- 奥山洋子 (2000) 「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話—質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に—」『日本学報』 45 輯 117-132
- 奥山洋子 泉千春 (2001) 「韓・日同国人男子大学生同士の初対面会話—情報収集としての質問と自己開示を中心に—」『日本学報』 49 輯 197-209 韓国日本学会
- 曹 偉琴 (1992) 「日中両国間の発話行為の比較対照」『日本語教育学会秋季大会 予稿集』 1-6
- 西田 司 (1996) 「初対面30分間の話題にみる日米の自己開示」『国際関係研究 国際文化編』 16 集 39-55 日本大学国際関係学部国際関係研究所
- バーランド、D. C. (1979) 『新版 日本人の表現構造—公的の自己と私的の自己・アメリカ人との比較—』 西山 千佐野雅子訳 サイマル出版社 (Barnlund, D. C. (1976) *Public and Private Self in Japan and the United States*)
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析」『日本語教育』 103 号 49-58
- 三矢真由美 (1995) 「話題の適切性と自己開示度—日本人と中国人の比較—」『日本語教育学会春季大会予稿集』 151-156
- Berg, J. H. & Clark, M. S. (1986) *Difference in Social Exchange between Intimate and Other Relationships: Gradually Evolving or Quickly Apparent? Friendship and social interaction* V.J. Derlega & B.A. Winstead (Eds.) 101-128 Springer Verlag
- Svennevig, J. (1999) *Getting acquainted in Conversation*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- Tryggvason, Marja-Terttu (2004) *Comparison of Topic Organization in Finnish, Swedish-Finnish, and Swedish Family discourse* *Discourse processes* 37(3) 225-248.

ちょう ゆさん／お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座
yusan52@gmail.com